

RCG 救対 ニュース No.2

党建設の新たな段階のオーストリアを
切り拓くために

読者からの報告

10・13ーある同志の報告

獄中からの報告(No.2) 榎原均

編集委員会からの報告

1976.12.25

党建設の新たな段階の第一歩を

切り拓くために

第一章 今日の非合法党の実戦上の

問題の解決についで

国際非合法党建設は、政治警察との斗争に打ち勝ち、日和見主義と対決して、国際的党派斗争の中でのみ達成されるだろう。

最近の国際的党派斗争の変化と進展、長期にわたって続かざるをえない日本帝国主义の上層の危機と下層の危機のはじまり、われわれをはじめとする革命戦争派の非合法組織に対する政治警察の組織破壊攻撃とプロレタリア諸派の一層の分散化、日本共産党党内一派の新たな修正主義としての純化、等々の諸条件は、われわれ

の手による国際非合法党建設の新たな段階への前進を緊急なものとして要求している。

われわれは、一九六九年以降の階級斗争の昂揚を日本における革命戦争の始まりとして把握し、自然発生的な武装斗争を党の指導の下に整然とした武装斗争へと発展させることを試みた。この試みは、軍華組織の建設として具体化されたが、この軍華組織の建設は革命党のとるべき態度として正しいものであった。

われわれは一九六九年以降のわれわれの党建設と武装斗争を基本的に擁護しなければならぬのであり、われわれは、武装斗争を清算し軍華組織を解体しよう

とする傾向に対し、革命戦争路線を清算する部分として把握し批判してきた。

革命戦争路線も色々あり、革命左派の反米愛国路線から、赤軍派の初期の前段階級路線、今日の日本赤軍の国際主義軍路線、連合赤軍の統一せんめつ路線、更には旧神奈川左派の世界永続革命戦争路線、反日アジア武装戦線の路線等々があるが、われわれは独自の道を進んで来た。

われわれの独自の道とは、P・C・C・Y・E、M・C・P政治軍隊、スターリン組織観の支配を拒絶した、細領の原則的部分にマルクス主義の階級斗争に対する原則を復権し、組織に対する中央集権主義の思想を具体化し階級斗争のすべてのあらわれを指導するところをめぐしたものであった。この独自の道は、政治警察との斗争、連合赤軍との党派斗争、清算派との斗争のなかで実現され、豐富化されて来た。われわれはこの道を革命戦争派の再編にむけて宣言し、一定の成果をあげてきた。

して掲げてゐる「経済主義とテロリズムの支配」を同ら実践的に正しく解決して「はい」という有様である。
(「マルサ同、井竹愛候補に投票せよ」とは、台同前にも口演派が未だ掲げていた「12・18路線の継承」をも清算して「はい」と以外の何であるのかぬ。)

烽火派は、12・18バンドからの脱退の誤りを公然と明らかにしなかつたが故に、私権民主主義の立場に立つたハズレ理論を再編集の基礎としたのであり、自らの組織的態度の誤りを隠蔽することによって政治的にも混乱したのであって、組織的態度(二州をめぐって細領の内実があらわにされるものである)の誤りを明らかにせぬに「経済主義とテロリズムの支配」というエスローカンを提起したところで、それは組織的態度における誤りを覆蔽するものに他ならなかつたのである。それはまた、烽火派が口先で非合法党や武装斗争について語ったところで、組織的実態は合法党としてかまよひを覆蔽するものでもあつたのである。

三。

マテ、今日、マテ系諸派に於いて、細領の下での党建設という路線が、新たな形態をとつた日共共主義・清算主義として登場してきている。

われわれは、その組織集券の細領に対して、それか経済主義的「仕方」で作成されていくこと、内容上での国際的党派斗争の回避、細領の前提に革命的「組織活動」が存在しないことを見ることが出来る。二

烽火派から脱退した「口演派」と「口演集券」の野合は、細領の下での党建設路線の内実を示すものであつて、口演派の実践上の混乱を野合にまよつて隠ぺいする役割を、かの路線は果たしたのである。そして、形成された「口演派」は、彼ら自身が実践上の最大の困難と

「経済主義とテロリズムの支配」は実践上の困難であつて、細領提起によつて実践上の問題を解決しようとする「口演派」の路線を主眼のは、やはり、細領そのものの内容に欠陥があることも事実である。すなわち、彼ら日本革命の当面の任務を「次のことを保障する」として「口演派」の権立を当面の任務とする「口演派」から明らかにしようとして、口演派の組織を「口演派」の経済的解決のための「テロ」として位置付けるのではなく、それ自体を「当面の任務」として設定していることであり、急進民主主義である。この人々は、今日の国際的党派斗争を「口演派」の経済的解決をめぐつて争われていくことを望んでおられるのであり、今日の革命党の実践上の問題を如何であるかを十分理解して「はい」が故に、一方で「口演派」の組織を目的にした細領をマルクス・レーニン主義の組織だと錯覚し、他方では、この細領をもって実践上の問題を解決できることを夢想して

いるのである。

確かに、オニクス・マンド及びその諸分派の諒りについて、その小自体を取り出して批判することは容易である。問題は、路線上の諒りを、軍事組織の建設と革命戦争への準備という方向でとりあげるのか、それとも、この方向を否定するためにとりあげるのか、という点にある。(マンド系諸派のある人々は後者をとっているが、混乱以外ではない。)

われわれは、この問題について、国際非合法建設の方向で検討されるべきであり、そうするに当たってはじめて、今日の革命党の実践上の諸問題を何であるかについて明らかにしようと考えている。一九六九年以降の革命戦争の存在を認めながら、マンド系諸派の諒りをとりあげ、革命戦争を否定しながらマンド系諸派の諒りを支服したと称する人々に対しては、革命戦争に専らしつと、その足をいっばる中流派として、批判しなければならぬ。革命戦争を否定する人々は、

常に党を軍事組織として建設することを目的にしている。このことからもたらされたものである。そして、この批判は、政治的には革命戦争を「革命の道すじ」として設定する発想と結びついていた。革命戦争を、党が採用する階級斗争の戦術の一つとして設定せず、階級斗争と同義に用いるという考え方をそれである。われわれは今日、革命戦争派の大きな欠陥として、党派の綱領のなかに革命戦争という戦術問題を含めてきたことと考えている。一九六九年のオニクス・マンド建設以来、われわれ自身そうだったわけであり、戦術綱領主義で革命戦争を綱領に含ませない限り、R.Gの創建と革命戦争を開始することかできなかつたという意味において、われわれは、この欠陥の歴史的正当性を認める。

しかし、多くの経験を受け、革命的マルクス・レーニン主義の綱領を復元しようとする今日のわれわれにとって、この欠陥は移植され訂正されなければなら

「火花」とか「オハイインター」に加盟すればいいのである。非合法党と武装斗争を諒りであることを主張すればよい。マンド系諸派の路線上の欠陥をもって革命戦争否定の論拠にしている人々こそ最も危険な存在であり、今日の革命党の実践上の諸問題を何であるかを隠蔽するものなのである。

第二章 再び「全国的政治新聞」の計画について

マンド系諸派は、軍事組織を建設するに当り、どの分派もレーニン「何をなすべきか」の限界なるものについてふれてきた。赤軍派、神奈川「左派」に至っては、はつきりとレーニン主義ではやっていけないと言明したものである。

そもそも、マンド系諸派のレーニン組織論に対する批判は、「何をなすべきか」において、レーニンを直す、歴史的正当性のつえにあぐらをかくことは許されない。

このことは、オニクス・マンド以来のすべての文献にあって、レーニン主義の理解をたしなめる作業は行なわれない。われわれは、三谷組織論×七にその基本的な内容を見いだしている。

三谷論文において、もっぱら権力の性格の相違からレーニンの時代とわれわれの時代との差異を指摘しようとする三谷は、文書の配布が非合法であったという点に、レーニンの全国的政治新聞の計画の特徴を見い出さずとしている。

「レーニンが全国的政治新聞を組織建設の環として設定し、全国政治新聞の配布網として隣村の組織をつくらうとしたのは、明らかに上記の模範ロミヤの現実的権力関係と祖自主義に対する社会民主主義的政治的内容規定を前提としている。大衆を革命に向けて組織し、党の下に結合していくという、政党としての自明

ずして現実的なものであった。

「党の基本組織は、政治局、細胞である。細胞は一つの物質力としての軍事単位であり、かつ大衆をそのまわりに結合してゐると同時に、双方との関係にみられて、ロシア内部に深く分散してゐる。そのまう細胞を政治局を指導するためには、旧来の中央委員會、各專向機関形式以外に、政治局が物質力である軍事組織単位でなければならぬ。そして政治局が軍事単位であるためには、政治局が最強の戦斗部隊を直屬させていなければならぬ。我々はこれをRQ(正規軍)と規定する。レーニン党は組織建設の環を全国政治新聞に設定した。そしてそれは当時のロシアの権力関係を前提して理解されねばならぬとのべた。今日ではこの機能はRQが果たすべからぬ。細胞を通じてたえず流入する大衆の自然発生性は、一方にみれば組織に構えと生血をふきこみ、指導部の旧い性質を点検すると同時に、そのまじい圧力で党を自然発生性

的意識的な政治教育を予えることか必要であり、この政治教育は全面的政治暴露を組織することではなからぬことを明らかにし、全国的政治新聞は全人民的政治的煽動と全面的政治暴露を目的として行はねばならぬことを述べてゐる。その限りで、全国的政治新聞は自然発生性との斗争の手段を提供するであらうが、レーニンはあくまでも全人民を対象とした斗争手段として新聞の機能について述べてゐる。ところが、三谷は自然発生性との斗争をもっぱら細胞と政治局との関係で論じてゐるのだから、三谷はレーニンの全国政治新聞の機能の一面をつまみ党の再組織とこの面にとりだし、それとRQの機能を同じものだと主張してゐることになる。さうして三谷は、レーニンの全国政治新聞の計画が、党の再組織の計画であつたと同時に党の型から規定されたものでもあつたといふことに十分注意を払つておらず、特に後者の役割を無視してゐるのである。

の前で解体させる。このまうはマルシヨマイデオロヤ一の党内への流入を細胞に対する議之ヤを指揮と指導を通じてなら、未然に防衛する政治局の建設の具体的媒介手段がRQである。」「(P.8)

RQの実践的終結から導かれた正しい改組提議を形式的なレーニニ主義理解にあてはめて、組織的位置付けを行つてゐるこの部分に、三谷のレーニニ主義理解の誤りを集中的に出させてゐる。結局、三谷は、党内斗争における具体的な措置と党の型をきつくと区別してゐない。

この部分における三谷の根本的な誤りを以下に明確にしてゆくことにしよう。

オ一に、三谷は、レーニンの全国的政治新聞と同様の組織の環として提起したRQの任務を自然発生性との斗争としてゐる。レーニンは自然発生性との斗争を社会民主主義者の任務としてゐるわけであり、社会民主主義者かこれをなしてけるためには党の首入衆に目

オ二に、三谷は「のあとで」RQは軍事を組織する党を権力との関係で、他党派との関係で、防衛し、かつ攻撃する最強の部隊であり、かつその戦斗体制として分散を原則とする細胞の日常形態を真中化してゆく任務をもつてゐる」(P.8)と述べてゐる。レニンは「秘密の機能の集中と運動の機能の専門化」と「指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化」との混同については、あらかじめ述べたが、三谷は「レニニヤ指導の中央集権化を組織に対する理想として述べたもっぱらRQの機能として論じてゐることである。これは、先に自然発生性との斗争を理想問題としてとりあつす新聞やRQの機能として把握してゐる点と相違があるが、全国的政治新聞は、組織に対する中央集権主義の理想を育てゆく手段ではあるが、それ自体が指導を中央集権化する機能をもつてゐるものではない。つまり、組織に対する中央集権主義の理想を真中化

して発行される全国的政新報は、指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化の手段として機能するであろうが、三谷の理解は二つではなく、全国的政新報の機能そのものが中央集権主義を育てるものと把握しているのであり、思想問題と組織の機能の問題として考えているのである。

二つして理解の上で、レーニン型の党では軍隊を組織できないことについて考えを導かれてくるのであるが、今日並に、レーニンの党組織に対する型をもち出して革命戦争の否定や革命の否定を行おうとする人々は、スト系諸派の革命戦争派が軍隊の機能をもちて機軸の機能を代えてきたことに対する裏かえとしてならぬ。結論的に言えば、レーニンはあらゆる事態に対して用意のある組織として党の型を想定しているが、このあらゆる事態「のなかには革命戦争も含まれている」ということか、われわれの考えであり、単に組織の建設と革命戦争の準備を止し「路線」すなわち、国際非

白話野陣設の階級の下にほくする

つ。われわれは、スト系諸派のレーニン組織論に対する誤ったドグマを克服し、党の活動の基本的内容をプロレタリアート・被抑圧大衆に対する政治的煽動にのみくことによって、党活動の新たな段階を準備しなければならぬ。そして、世界のプロレタリアートは公認の共産党にまっことその経済的地位に対する正しい思想を置かれないことなく、もっぱら市民的自由の正めの斗争を置かされて来、公認の共産党に対する左派の運動も共産主義的宣伝と煽動に成功してはなかったのである。

(註) 以上からするならば、スト系諸派の「革命戦争」論は刊号下の「それには自らを独自の政変に組織し革命戦争を準備する」という不可欠なのである。「それ」は表現は説明の余地があり、「それ」には自らから社会とは独自の政変に組織しなければならぬ。この向の階級斗争の経験は、この党が革命戦争

争に対して用意することか必要である事を教えた

「」として修正されたければならぬ。

一九七七年二月二日

共産主義者同盟 (RCG)

読者からの報告

10・13、夜10時30分すぎ、アパートを何層もつるぎく鳴る。のどろきから見たら初老の男が二人は見える。「おなはですか」と向うで「警察の者だ」といふ。戸を閉めたまま、押し問答し救援ノートなどを用意する。チェーンを付けて戸を開けると、令状をキラキラと示し、家の中を見せてもらったといふ。

令状を渡させてもらったに、着がえをしたら、パジマだったのよといふので、「コーンじゃいんだらう」といふ言葉。結局、被疑者氏名、捜索の場所、執

行人代表、許可をうけた裁判官の名だけと写したか、その向も「切るぞ」「早くあけろ」といって、罵声を飛ばす。

チェーンを大きなパンチのようなもので切られ、合計七人か私の部屋に入ってきた。同居人を写真をとろうとすると、ストロボをこわされ、手を2、3人で押さえる。

チェーンの件とストロボの件を抗議すると彼ら女官には、「問題にしてこらんよ、裁判でだって勝てないんだから...」救援連絡センターなんてこの首つこどばかり信用してんだから。「テーラ」ライターをつけようとするところを切替し、「おれみよ」といふ美力行使と二つ自様。

捜索時間は 午後10・四五〜午前五・一〇

10.13 ある同志の報告

夜十一時半頃、××他一名が、書きものを盗んでいたところ、ドアを激しく叩きながら叩いて、男がバラバラと部屋に押し入り、捜査令状を突きつけ、「確認しろ」と言つたので、一応形式的に確認した。

サツは、われわれ二人を隅に押しこめ、勝手知ったわが家のごとく、衣類↓書籍↓文書綴り↓工具、家具等々を一つ一つ広げ、ほごき、点検し、彼らが目ぼしいと判断するものを一袋一袋く入れこめた。

……へ中略……

われわれ二人は、このなかの間に、トイレ(部屋の外の共同)に、私か一度、もう一人の番を一度行った。

この際にはサツが付添った。(逃げられないように)一回目は、われわれは男どなく部屋に戻った(スキそつなはいつつ)。午前2時頃、もう一人の彼は、もう一度トイレを要求し、付添いを後尾につけ、部屋の外に出て行った。その後、付添いのサツが戻つてほ

そぼき言つたには、「逃げられたい」と。彼は胸の中をばらして消えて行った。

午前5時に、この日の全作業は済み、「事情を聴くから近くの署に乗りこ」と言つ。いざいにして逮捕は不可避と覚悟し、一緒(4人程)に部屋を出た。タクシーを待つ時、スキを見て、公安たちと陸上競技を展開したか、つかまつた。

警察署では、午前9時頃に帰つてよといわれ、帰る時点で、指紋(左手全体)採取を強制された。

(付) 捜査令状には、既に部屋にある物件を書きつらねてあったように思われる。たとすれば、不法な手段で部屋に侵入し事前に部屋を調べられていた可能性がある。

獄中からの報告 No.2

榎原均

へ政治警察の攻撃手に対し

大衆的なる反撃を

早いものでもう二ヶ月間がすぎ去ろうとしています。この報告が皆さん方の手に届いた時には第一回公判(12月21日一時京都地裁)も同近でしょう。私は元気で以前と同様に党に対する責任をはたしています。

11月の下旬に入っても政治警察は攻撃の手をゆるめず、爆取による逮捕、起訴、勾留によってわれわれの党活動に対する破壊の策動を継続していることか伝えられていきます。しかし二つした攻撃が効を奏したのは最初の二斉逮捕のみであつて、われわれは不利な条件下の下にみかればならぬ着実に陣地を整えつつあり、新たな状況に対応した党活動を展開していきます。

百ヶ所以上に及ぶ家宅捜索は党の秘密活動の見地からすれば、たしかに大きな打撃でした。しかし家宅

捜索を受けた人々、今回の政治警察の攻撃から教訓を学びとり、党活動及び非合法党との結合についての技術をわななものとてゆけば、われわれは失ったものよりも新たに多くのものを得ることを出来るでしょう。また、家宅捜索が、単に党活動に対して打撃を与えただけでなく、大衆運動の組織や個人のフライバシーに

対しても損失を与えています。むしろ政治警察のねらいは、家宅捜索に際しては、党の組織活動の破壊と二つよりも、大衆運動の組織や、個人のフライバシーに損失を与えることに力点があつたと思われれます。彼らはどうすることに於いて、党組織と大衆運動の組織及び支持者との切りははすことが出来るかと考えているのです。

われわれはこの五年間にわたる党の秘密活動の経験のはかから、非合法党建設の問題は、単に党員の向

であるばかりか、広汎な支持者及び大衆運動の組織の
向題でもあると考えてきました。これは支持者及び大
衆運動の組織が政治警察との斗争の経験を持ち、一定
の秘密活動を身につけていることこそ、非合法党が成
長してゆく際の不可欠の条件であると考えました。
したがって私は今回の家宅捜索攻撃に対して非常に大
きな関心をもっています。と一つのは家宅捜索攻撃に
よってわれわれが孤立させられてしまふか、それとも
政治警察の攻撃に対する反響を組織し、逆になわれわれ
がより強固な基礎をつくりあげるかという二つに、非
合法党建設の今後の消長がななっているからです。

私は身柄が留められているという不利な条件にあり
ますが、今回の政治警察の攻撃を受けた多くの人が
政治警察と斗争し、この置かれた条件の下で要求され
ている秘密活動の技術を身につけてゆく斗争に対して
出来る限りの筆をしたいと思います。

一九六〇年代においては、大衆運動を組織したり

こうした作業からはじまると思ひます。

入共産主義の田畑で式を執りしるのく

先に私にわれわれが逮捕され、取り調べを受けた時
の政治警察との斗争に因りて自分の経験をかき立て報
告しました。そこで提起されている思想向題は、家宅
捜索等と一。た政治警察の攻撃に対する斗争において
も適用するのではないかと考えます。今回の政治警察
の家宅捜索は爆発物取締罰則にもとづくものであり、
全く不当なものですから市民的自由の見地からこの攻
撃を斗争することは必要であり、また重要だと考えていま
す。しかし、市民的自由の見地からの斗争の目的はな
らば、政治警察の狙いのうち、少くとも一つの主要な
狙いを實現させてしまひます。と一つのは、市民的自由
の見地からの斗争は非合法党建設と結びつたないか
ら、非合法党建設と切斷するといふ敵の狙いはその限
りでは生きこくるのです。私は政治警察の狙いを全て
打ち破るためには、非合法党建設と結合する斗争に従

て参加することを要求として、多くの活動家や革
命家とそのオーストリアを踏み出しました。私は今回の政治
警察の攻撃を聞いてみると、二の攻撃との斗争のほかで
多くの人々か、活動家や革命家として成長してゆく
のではいかと考えています。もちろん、大衆運動や
デモは、参加する側の主体的な選択によってなわれ
てゆくのに対し、今回の政治警察の攻撃は、攻撃され
る側に選択の余地がなく、不意を打たれるという違
いがあります。しかしわれわれのやりかた次第では、不
意打ちに対してもあらかじめ準備することは出来る
と思ひます。

さしあたって私は、政治警察の今回の攻撃の真意を
調査して二つから二の種の攻撃を無害のものとするた
めの措置を定めてその内容を宣伝することを必要だと考
えています。多くの人々か教訓を「R.G. 救済ニエート」
編集委員会や、その他適当な連絡をまで寄せることを
要請します。政治警察の攻撃に対する大衆的な反響は

属させて、市民的自由の見地からの斗争をおし進める
ことを必要だと考えています。

政治警察は、マルタリマート、被抑圧大衆をその
搾取条件にしようとしておくれたためのマルジョアミーの
道具です。マルジョアミーの
政治的支配は、彼らのおマルタリマート、被搾取大衆
に対する経済的支配を維持することを目的としていま
す。だから、マルジョアミーは、マルタリマートか
経済的解放を目ざした斗争に立ち上らなは限りにおい
て、政治的、経済的の両方に於ける用意があります。15
それゆえ、経済的解放の斗争と結合されることのない
マルタリマートの政治的、経済的斗争は断絶的なも
のとて目的的發展する契機を持っていません。と二
つが、経済的解放の斗争と結合された政治斗争や経済
斗争が提議されるべきなら、下準備がなされるに
かありませぬ。といつのは元の場合、マルジョアミ
ーの敵はマルタリマートの因縁を解体させる要素
となりませぬ。後の場合は、マルジョアミーの敵は

プロレタリアートの団結を強め、その斗争力を強める
ことにはなるからです。

われわれはプロレタリアートの経済的解放をかりけ
非合法的建設を遂げてきました。この斗いは、一九六
九年以降一つの潮流として発展した革命戦争派が革命
的マルクス・レーニン主義の単一党として結集されて
ゆくための唯一の保障です。政治警察は、革命戦争派
が発生して以来、この潮流に対して非妥協的斗争を
いざこざさせた。この斗争で彼らはいくつかの勝利
を得たことでもありません。しかしその勝利は、譲歩に
よる勝利ではなくて、あくまでも徹底的弾圧にもと
づく組織の解体によって得られたものです。(もちろん
着算派に対しては一定の譲歩をしています) われ
われは革命戦争派の四々の党派の政治警察に対する敢
北から及び弾圧のま、ただなかで覚悟を強化してい
ける路線をレーニンとボルシェヴィキの経緯に學んで
今日に到っています。

私は先の報告で「プロレタリアートに、資本家への
自からの経済的服従にのみあてせ、そこから階級的な
力を引き出すような共産主義的の思想的働きかけは」
社会党、共産党によって全くなされてい(り)と書い
ました。彼らは労働組合的権利と市民的自由をよりと
ころとして、ブルジョアジーの支配に対して斗争して
いるにすぎません。これではプロレタリアートの経済
的解放、共産主義革命のための斗争を組織出来るはず
はありません。

16
エンゲルスは「産業の世界では、資本家階級の法律
上の利便の特権が、より除去され、両階級の完全な
法律上の同権がうちたてられてのちに、はじめプロ
レタリアを重圧する経済的抑圧の存在が、その完全な
鏡ごであられくる。民主共和制は両階級の対立を
揚棄するものではなく、かえってこの対立をたか
ぬかれる地盤をはじめて提供するのである」(「家族

私有財産及び国家の起源」ロイ文庫 P. 4) と述べてい
ます。この民主共和制に關する示唆に富んだ洞察は、
社会党や共産党の幹部達が気づいてみらず、また忘れ
去っているものです。なぜなら、彼らは民主共和制の
下で、行っていたら、労働組合的権利や市民的自由
のための斗争を宣伝煽動し、そうすることか、プロレ
タリアートの解放斗争の利益になると考えているわけ
です。だから、たかこうした思想は全く非共産主義的の思
想であり、プロレタリアートの意識を曇らせるもので
す。

民主共和制が、両階級の法律上の同権を宣言した政
治体制であったとしても、ブルジョアジーかその同権
を政治生活や社会生活の上で実施するだろうと考える
ことほど馬鹿げた思想はありません。ブルジョアジー
が両階級の法律上の同権を安んじて宣言しているのは、
ブルジョア革命の時代にみれば、プロレタリアート
及び農民と同盟して封建的旧支配階級を打倒するた

めであったし、現在では、プロレタリアートに対する
経済的支配が、資本制的生産様式として成立している
からにはありません。資本制的生産様式は、プロレタ
リアートをしてその生活条件の維持のための斗争に立
ち上らせるだけでなく、経済的解放のための斗争にも
立ち上させます。これに対してブルジョアジーは、
プロレタリアートを搾取条件の下に押しつけておいた
めにプロレタリアート、被抑圧大衆の労働組合的権利
や、市民的自由を常に侵害してきました。金融資本が
発展し、資本が一口の外文をその自己増殖の手段とし
て利用するようになり、帝國主義が成立した時以来、
資本は他民族に対する支配とその不可欠の生活条件と
するようになり、ブルジョアジーの国家権力は増々巨
大な権力へと成長し、プロレタリアート、被抑圧大衆
に対する政治的抑圧はますます強大なものとなってき
ました。二つした状況のなかで、社会党や共産党の労
働組合的権利や市民的自由のための斗争はプロレタリ

マーチの解放戦争であるという思想が生きかたてています。こうして思えば、巨大に成長したブルジョアマーチの国家権力に対する恐怖を裏にしたブルジョアマーチに対する彼らの屈服を意味するものに他なりません。日本ブルジョアマーチが再び、他民族抑圧のために自らの軍隊を利用して、侵略反革命戦争を準備しようとする時、この思想は、社会非主義へと転嫁してゆかざるをえないであろう。共産党のブルジョアマーチ独裁の攻撃や、社会党の連立内閣構想等はどのあられもないです。

帝國主義国における野心的貴族の影響力をもとにして、社会共的思想は、ブルジョアマーチのなかで一定の力を維持してきました。この社会共的思想の影響力は、ブルジョアマーチの経済的解放という正しく共産主義的置換、煽動が全くなくなつていなくなつた時代において、「革命思想」として迎えられるべきです。だから日華感闘争、労働争闘のつらみがあります。帝國主義国家権

ブルジョアマーチが、自らの経済的解放の斗争に從屬して野心的野心的権利や、市民的自由のための斗争を斗争ことを争んでゆけば、社会共のブルジョアマーチに對する思想的影響力はとるに定らないものとするところから見て、

私にわれわれの政治警察との斗争も、このブルジョアマーチの共産主義運動と結合されたものとして闘わなければならないことを考えます。この思想に立てば、われわれは政治警察の攻撃そのものから斗争力を引き出し、強固な非合法党を建設し、ブルジョアマーチが共産主義と結合してゆくことを援助することから、これを確信して、

入政に石野警察による思想に攻撃の

争い例 続々
さて最後に、そのオーサーが、取り纏へた政治的権威攻撃の事例に、この報告に移ります。政治警察の幾く、人間性とは家族制度において、

力の反動と暴力は他民族を支配し、ブルジョアマーチ被抑圧大衆などの権取条件の下に、そのためのものであり、それゆゑこれに對しては、ブルジョアマーチの経済的解放の獲得し、その下にその斗争に從屬させて、野心的野心的権利や市民的自由のための斗争を闘わなければならないという思想が共産主義的思想として復讐されつつあります。

エンゲルスは民主共和制の下で、「はじめはブルジョアを重んずる経済的抑圧の特性が、その完全な後、その要求した。帝國主義の成立以降もエンゲルスの指摘は向ら変更するに俾はりません。ただ、帝國主義国家権力の巨大な暴力装置に恐怖した日和見主義者達から、このエンゲルスの指摘は、向らあり、もつぱら反動化と暴力に取らるることをもって、「共産主義」の名を口にして、そのか後格付けられるは、りません。

では、このことをいえます。「君は耳とつた面親を養つ義務がある」「面親をばつたら、かして活動することはない」「家族をやしなつた上で続ける活動は、地についたものであり、必要なものとして評価されること、これを言葉にすれば表現されていきます。ところが、この

し、ブルジョアマーチの向親ならば、取り立ててせんやくする必要はないわけですが、彼らは、この家族における人間性、保のありかたについて、彼ら自身の主張を提出した上で、今度は、この主張を彼の組織を擁護する際の主張としてあしせし、それをもってわれわれの覺悟活動に對して攻撃をなけてきます。つまり彼らは、家族の運営における主張をもとにして、彼ら自身の覺悟活動を提出して、くるのです。幹部職員と一般職員との指導、指導関係について、「愛情がある」とか「冷淡」とか、「人間的だ」とか「非人間的だ」とか、色々言つてきますが、基本は、家族の運営における主張を基礎として、います。もつとも、時たま、警察の直接組織にお

ける人間関係等をも例に引いて下さいますか。

これらの攻撃のうち、彼らも最も強調したのは「責任の取りかた」でした。「幹部は部下の誤りの責任を取らなければならない」「誤まりを陥した場合、他に責任を転嫁せずに一言自分が責任を取る」と言えはよいのだ」「どうだ、君も全ての責任を引き受けて二二で反省したらどうか」「責任を取らないのか、そんな無責任な男なのか」といった具合に、段々と論議をすりかえて、最後は、自供することを責任を取ることにたどり着いた論理をもち出してきます。「たしかに二二で自供する方が、黙秘していることよりも君にとって苦しい事だろう。しかし勇気を出して決断したらどうか。責任を取って後悔したらどうか」というわけだ。

責任のとりかたに際して言えは、われわれは、雙とるロシタリヤートに対する責任を取ればよいのであり、組織に対する中産階級主義の思想にもとずいて自からの義務をばたしてゆけばよいのです。だから、家長

か責任をとる事だ」といった話を導くことに利用されます。二の種の話をしかけられた場合は、組織に対する中産階級主義の思想の根柢を固く守ることが向かわります。

次に、政治警察の説く「人間性」を何であるかということとを端的に示しているものとして、婦人に対する取り調べの内容があります。度々同志に対する取り調べにおいて、警視庁の刑事は「実家に帰って、結婚して、子供を産んで親を安心させろ、それが一番の幸せだ。女の幸福とは、結婚して、子供を産んで、分となり男につくすことなんだ」といったことを話しかけてきたという報告がありました。

この話に明らかのように、政治警察の説く「人間性」の基礎となっている家族制度は、男の女に対する支配の上に成り立っているブルジョアの家族制度のことです。このブルジョアの家族制度は、今日のフロシタリヤの家族関係の実際とは合わなくなっています。ま

的は、又は親父子分関係にみられるような、部下の責任を幹部がかばうことになって、その責任をあたりにしてしまつたことは許されません。こうしたやり方は、もつぱらさつすることによって、一家や一部局の結果を固めることをめざしてあり、幹部の狙いはそこにあるわけですか、われわれはこのような手段でもって組織を固くする途はとるべきではないと考えます。

取調べの場で、自供することは、決して雙とるロシタリヤートに対して責任を取る事にはならないことか、はっきりと理解されたいとしても、党組織に及ぼせる責任の取り方の問題で政治警察の組織論に同調してしまつと、ズルズルと自供にまで引きずられてしまつたとはありえる事です。政治警察はわれわれの同志相互の団結をくすすために、仲間に対する世難やそのかし、誰か誰かに対してあつた、こういふた、といつたことを話して来ますか、これらの話は太むね、親父子分関係的な責任のとりかたに集約され、「自供する事

ロシタリヤの家族関係にあつては、ブルジョアの家族制度を更迭する物質的条件が失はれていゝのです。

ブルジョアの家族制度は女に対する男の支配であり、社会の経済的単位としての個別家族を意味しています。その物質的基礎は生産手段の私的所有にもとづく富の男への集中であり、この富のその男の子供への相続の必要性にあります。だからブルジョア的婚姻締結は打算であり、階級婚であり、個人的恋愛関係は例外的な事であつて、その結果、この一天一婦制、この法律上の単婚という形態には必ず婚妻制によって補足されてあり、それゆゑこの婚姻は「女のかわの単婚であつて、男のかわのそれではなかつた」(マ家族、私有財産及び回家の起源 P. 16)とエンゲルスは看破しました。

ブルシタリヤの家族にあつては、男に富をもたらす生産手段の私的私有は存在せず、したがつて子供に相続させるべき富もなく、男の女に対する支配をもち

編集委員会からの報告

創刊号にひき続いて、政治警察の攻撃について報告することにした。

爆取一条、三条、八条、九条、放火・毒物劇物取締法違反・虚偽の刑取締法違反、空想などのあらゆる罪名をつけての今回の政治警察の攻撃は、組織破壊法の實質的適用攻撃であり、蜂起五系などに対する攻撃にひき続いて、共産主義者同盟(RG)の抹殺を意図したものである。

逮捕・起訴された一覽表は次の通りである。

氏名	罪名	処分
10/14 竹内 毅	爆3	11/4 起訴 京拘
坂井 健直	爆1	12/7 起訴 東拘(接禁)
大賀 英二	爆9	12/9 起訴 東拘(接禁)
原 雅子	爆9	12/9 起訴 東拘(接禁)
高村 清純	毒劇物	12/9 起訴 東拘(接禁)

10/14 高村和枝	毒劇物	11/4 起訴
10/15 山本 聖	虚偽	11/4 起訴
10/17 王生塚博	爆8	10/29 起訴
10/18 中屋 未人	爆3	11/9 起訴 東拘(接禁)
10/19 田中正治	窃盗	10/31 起訴
10/28 藤沢 徹	爆9	11/18 起訴
10/29 王生塚博	爆9	11/19 起訴
11/1 田中正治	爆9	11/22 起訴
11/4 坂井 健直	毒劇物	11/25 起訴 東拘(接禁)
11/5 大賀 光彦	爆9	爆1・放火 起訴
11/13 正田 慎介	爆9	12/4 起訴
11/17 大杉 龍夫	爆1	12/8 起訴 東拘(接禁)
11/18 藤沢 徹	爆1	12/9 起訴 東拘(接禁)
11/27 原 若司	爆1	12/18 起訴 保安取消
11/29 正田 慎介	爆1	12/30 起訴 東拘(接禁)
11/29 王生塚博	爆1	12/30 起訴
	放火	起訴 警視庁(接禁)

このうち、同志雑誌は、政治警察による同志の病氣を利用した事実上の拷問に対して、一時的に屈服したが、今は立ち直り、起訴されている。政治警察は、療養中の同志を逮捕し、囁語医に勾留に耐えらされること、診断をさせ、その同志の身体に拷問を加え、「自決」を強要する道を選んだのである。われわれはまず、この政治警察の拷問を、階級敵に対する一足敷い憤慨をもち、之を弾劾する。

虚偽の刑取締法違反で逮捕された山本君の場合、弁護士選任を一言こぼして握りつぶされている。「虚偽の刑取締法違反にしている」というデッチ上げを維持するために、政治警察にと、之は弁護を握りつぶす(三浦某は、「センター」の弁護士を頼んでも連絡しない)「偽造な連絡したから」弁護士は来なかつた。たんだ「たんだ」ホサキ、検事お抱えのブル社以外の弁護士接見を拒否していた張本人の一人である(ここは必要だったのである)。「資金源に虚偽の刑」の意味は、こう

いうことだったのである。同志雑誌に対する「取り調べ」は、同志雑誌の報告と異なる如き差別に著した代物である。「取り調べ」の報告は情状記載と行く予定である。「取り調べ」は思想斗争の場である。之、ブルジョアとプロレタリアとの階級斗争であるわけだ。「取り調べ」の報告は思想斗争の報告でもあることに読者諸君は注意して頂きたい。

獄中斗争は、ヤカRG、ヤカRGの水と火とで闘った闘争の闘いだった。政治警察は、諸同志に対する逮捕・再(々)逮捕、転向強要攻撃とともに、被逮捕者の容疑にこぼつて未曽有の無差別強制捜査を「科学捜査」した。「牢」の山に仕出さくれば「メソケ」の「関係」が明らかになければ「メソケ」の、という(メソケであるが、ささ、メソケ)逮捕・起訴及び家宅捜査は、何ら法的根拠のないものである。すなわち、これらは、何ら「法律」定めざる手

「科学」にあらわいものがある。(最高裁の判例にも、
「爆取は「法律」として認めらるべき。)

司法官廳、裁判所をめぐり、特に野村胡堂、キヤンペー
ンを張った朝日等のブルジョア新聞は、この「爆
法違反」を犯したわけである。革命党を破壊し革命戦
争を「中止」するためにはなりふりかまぬ彼らは、
「科学的」にも、「犯罪の明示」をせよとせよとい
ふのである。

このことは既に、あきましい理由をもつてこの逮捕・
捜索(必要ならば令状なし)の捜索押収つまり「窃盗」
の政治警察にと、この自由の「根柢」であつて、この
向の爆取も系違反デモ、干上げをも、この無差別家宅
捜索(竹内逮捕・爆取の系デモ干上げ)による別件逮捕
は、革命党破壊にたりふりかまぬ政治警察などとの
程度にこの自由を行はせぬというかを物語、という。この
ことからも、政治警察の攻撃の政治的狙いは見え
てくるのである。

デモ干上げをもつての干渉入りの無差別性といつた
ことは、今回の10・13事件の本質的に「急襲」であつ

た。敵にこゝとは一時のきにしむらやむの事、政
治警察をこゝにパーマンのうに考へる人は、誤つて
ことゝの別証である。獄中・獄外に政治警察がつか
いては革命党に対する「科学捜査」の内実たるや
少くあげられねども、その「科学」は、いかに
くまう代物であつて、革命党に対する政治警察の「科
学捜査」は、マルクスの共産主義者同盟のトルン共
産党事件に対するそれ以来、「伝統」あるものである。

(註) 二二二、政治警察は主張する「被疑者」を

(1)同志生塚に対する爆取(系) (2)同志正田に
する爆取(系)に「公明」をこゝに

(1)同志生塚に対する拘留状あり

「被疑者」 昭和50年10月15日、東京都杉並区
荻窪駅南口派出所において発生した爆発物使用事
件にらひに同年11月21日、大塚市北区内の島子

目本善地三井物産ビル中庭において発生した爆発
物使用事件の犯行計画にらひに犯人等を認知した
はら、警察官若くは、これに、之被害を被けん
とする人に対し、之を事畢を告知せず、之を爆
発物犯罪に處する告知義務に違反したものである。

(2)同志正田に対する拘留状あり

「被疑者」 共産主義者同盟R.G.の構成員であ
るが、同志幹部自称大塚雄二こと竹内毅、昭和
46年9月21日、東京都板橋区中台マ丁目3番
地155番地において発生した爆発物取締罰則違反
被疑事件につき、被疑者として警察へ捜査を受け
逃走中との事を知りながら、中略
数回にわたり、同志の秘密活動の実態ありは
警察の動向等に關する報告書類を作成、これを各
竹内に送付し、同志の逃走を容易ならしめ、之
を、犯人を凌駕したものである。

「科学捜査」の大部分は、支持者とせよ関係者に対

するものである。政治警察は、「週報」市民の敵、
市民のための警察「キヤンペーン」を張り、その「科
学捜査」(例えば、夜間に完全武装というはたは物騒
な「科学」、支持者の全生活の監視というはたは狂
通の「科学」)を爆発化、常態化し、革命戦争に立ち
あなうつとここのプロレタリアート人等を、革命党
の破壊と支持者への恫喝をもつて、人日戦線にお
かむことを狙つてゐるのである。今回の攻撃は、こ
うして、今日の同志再編に対する政治警察の対応こそあ
り、ロッキード事件に際しての、「警察・検察・裁判
所」の官廳及健全であり、折衝関係が安定してこれ
は、政局の混乱はひり切れる。たは板田発言に照応し
たものである。

政治警察の攻撃に対する反撃の斗いを破壊に結果
させなければならぬ。われわれは、今回の攻撃に
つて、われわれの路線を再検討し、敵の力量を占奪する
絶好の機会を得たわけだ。今回の事件は、教訓をたす

ええ、前通し勝利して頂くだろう。(12月25日)

〈付録〉がけ入れの際のデカ語録(抄)

(イ)「赤報はつづけていき、だから、お前もやめていきえ。」

(ロ)「もし活動をやめなければ逮捕するぞ。」

(ハ)「誰にでも周知にはあるから、昔のことは昔のこととすべし話せ。」

(ニ)「すいきせんと一言いえば、たいてい違うんだから。」

(ホ)「お母さん、お父さん泣くる。」

(ヘ)「現場もがけ入れするぞ。」

(ト)「あきり抵抗すると公妨で逮捕するぞ。」

(チ)「身体探索令だというの、身ぐるみはいふ調べる

ことぞ、このくらいポケットに手を突、必むこ
とには令状なしでできる。」

(リ)「市民生活を騒がす過激派に属することたのぞ、
ろくろ槍打をたのみます。」

共産主義者同盟 (R G) 検挙事件公判斗争への資金カンパの要請

(一) 私達共産主義者同盟 (R G) は、一九六九年から七〇年にかけて闘われた武装斗争の革命的伝統を継承し、一九七一年秋に結成されました。私達の前身であつた第二次共産主義者同盟は一九六九年に武装斗争の方針と党の改組、軍の建設をめぐつて赤軍派と分裂しつつも、R Gを組織し、一九六九年から七〇年にかけて中電マツセンスト、弾薬輸送列車阻止斗争をはじめとする武装斗争を闘いぬきました。一九七〇年に入つて、この武装斗争と軍事組織をどのように評価するかで同盟内に論争が起り、武装斗争と軍事組織を堅持することを主張した部分は12・18路線の下に結集してR Gを再組織し、その結果、第二次共産主義者同盟は、清算派の日向派をとり残して12・18ブンドへと改組されました。12・18路線の革命的意義は「スターリン主義打倒・反スタマルクス主義の止揚・革命的マルクス・レーニン主義の復権」というスローガンに簡潔に表現されています。

R Gを組織した12・18ブンドはその活動の中心を武装斗争の再開に置いていました。当時の情勢は武装斗争の多くの試みが失敗しつつも、しかし、その失敗を乗り越えて武装斗争が展開される条件にありました。ところで、武装斗争の再開が日程にのぼるにつれて、同盟内に三つの傾向の存在が顕わになつてきました。R Gの武装斗争を非武装の大衆斗争の引き金として位置づけようとする後の烽火派が党組織と軍事組織から脱走し、旧神奈川左派が党組織を連合軍へ解体する解党提案をするに及んで私達は共産主義者同盟 (R G) を組織し、12・18路線を継承して独自の道を歩み始めたのです。

(二) 以降、今日までに到る五年間の私達の闘いは一口で言つて革命戦争派の単一党の建設をめざすものでした。私達は、一九七一年の武装斗争に対する政治警察の攻撃から組織を防衛しつつ連合赤軍との党派斗争を闘い、連合赤軍の党的破産以降は赤軍派の清算主義と日共革命左派の復古主義に反対し、革命戦争派の思想的統合に向けて努力してきました。

第一インターナショナル規約前文にあるマルクス主義の階級斗争に対する原則を綱領の原則的部分に復権し、レーニンの組織に対する中央集権主義の思想に正しく学び、非合法党を打ち鍛える闘いは、多くの人々から共感をもつて「えられました。だが、私達の非合法活動にも弱点があつたことが次第に明らかになつてきました。それは、私達の党活動とプロレタリアートを結合させるといふ点において、いまだ手工業的な手段を克服しきれていなかつたことでした。私達がこのことに気付き、この弱点の克服のための作業に取り組んでいる最中に、一〇月一三日に始まる政治警察の共産主義者同盟 (R G) に対する攻撃を許してしまつたのです。

(三) 私達はこの攻撃によつて多くの同志達を逮捕され、党の組織は打撃を受けました。しかし、政治警察の検挙攻撃に対しても私達の党建設の基本路線はゆるがせられることなく、私達は新しい条件の下での党活動に入つていきます。一部の不幸な状態にあつた同志を除いて、逮捕された同志は全員完然で闘つており、外の同志達も教授センターの方々や弁護士諸先生の援助を得て強力を救援活動を組織しています。

ロッキード事件にみられるブルジョアジーの腐敗と内部抗争は資本主義の支配体制がゆるぎつつあることを示しています。他方で、社会党はいりまでもなく、プロレタリアートの激怒を放棄した日本共産党官本一派の議会政党への純化は、プロレタリアートが革命的マルクス・レーニン主義に接近する条件を広範に作り出しています。こうした情勢の中で、政治警察は革命

戦争派の非合法組織の破壊に血道をあげています。何故ならば、ここにこそプロレタリアートの未来があることをかれらなりに理解しているからです。私達は大きな打撃を受けたとはいえず、この打撃を試練として受けとめ、非合法の党活動とプロレタリアートを結合する革命的マルクス・レーニン主義の道を切りひらいていく決意です。

四 さしあつて、私達は今回の政治警察の攻撃に対して、公判斗争を闘うことを余儀なくされています。保釈金の高額化一つとつてもこの斗争は私達の組織の財政活動の枠を超えています。皆様方の資金カンパをお願い致します。

共産主義者同盟 (R.G.)

定期カンパの要請

一口(五千円)以上

送り先 オーク業銀行 虎ノ内支店

口座番号 〇四六一二二六一六二〇

堀江幹男

東京都港区新橋 2-8-16 石田ビル4F

救済連絡センター 発行

「R.G.救済ニュース」編集委員会

カンパ 500円